

フィールドから学ぶ：高所の牧畜社会の研究

愛知県立大学名誉教授 稲村哲也

1 はじめに—フィールドとの出会い

私が初めてペルーを訪れたのは1978年のことであった。ペルーでの考古学的研究は、泉靖一教授が率いる東大アンデス調査団によって、すでに1958年からの大きな蓄積があった。民族学・文化人類学に関しては、その年、増田義郎（昭三）教授が初めて調査団を組織した。そこで、当時大学院生だった私にもお声がかかった。調査団のメンバーには、後に東大アンデス調査団を率いる大貫良夫氏（東京大学名誉教授、野外民族博物館リトルワールド館長）、アンデス民族学研究の第一人者である山本紀夫氏（国立民族学博物館名誉教授）をはじめ、そうそうたるメンバーがいた。

ペルー調査が始まって、あるとき、大貫良夫氏、友枝泰啓氏（故人・国立民族学博物館名誉教授）と共に、地上絵で有名なナスカからアヤクチョの山岳地帯に車で上った。私にとっては、標高4,000メートルを超える初めてのアンデス高地体験だった。そのとき、二つの初体験があった。ひとつは、頭が割れるほどの高山病を経験したこと、もうひとつは、交易の旅をするリャマのキャラバンを見たことである。隊列をなし、振り分け荷物を背に載せた数10頭のリャマの群れが、草原の彼方から突然に姿を現した。リャマの隊列は草原をしずしずと進み、インディオの牧民がそれを追う。アンデスの風土に溶け込んだ、美しいその光景に見とれていると、高原の緩やかな起伏のむこうに消えていった。

リマに戻ってから、「リャメーロ」（リャマ飼い）と呼ばれる牧民についての資料を探した。しかし、英語やスペイン語で書かれたものにも、彼らの生活を知ることができる満足な文献はなかった。日本語の本では、アンデス考古学の権威で、当時東大アンデス調査団を率いていた寺田和夫先生（故人）が、「新大陸では、アンデス地域のリャマ、アルパカなどの家畜化が行われたが、牧畜形態は発達しなかった」（吉田禎吾、寺田和夫1974）と書いていた。さらに、牧畜研究の大家で当時国立民族学博物館館長だった梅棹忠夫先生（故人）も、「こういう家畜（リャマ、アルパカ）をせっかくつくりだしていながら、新世界においては、生活様式として牧畜生活を採用したという民族は、ついに一つもあらわれてこなかった。」「のちに北米インディアンであるとか、あるいは南米においても、そういう牧畜生活があらわれてまいります。これはしかし、ぜんぶコロンブス以後のことであって、もともとの新世界の住民には、牧畜生活者はいないので。したがって、わたしどもがここで牧畜の起源の問題を論ずるときには、新世界のことはそっくり棚上げにしてかんがえてよろしいということになり



アンデス高原のリャマのキャラバン



アンデス高原、キャラバンの休憩



トナカイの搾乳（モンゴル北部タイガ地域）

ます」(梅棹忠夫 1976) と断じていた。

「南米には牧畜生活者がいない」のだとすれば、アンデス高原で目にしたあの光景はいったい何なのか。「家畜化が行われたが、牧畜は発達しなかった」とはどういうことなのか。そのような問題意識が、その後の私の研究活動を決定づけることになった。

その後は、1978年から1980年にかけて、ペルー南部アレキパ県のアンデス高原(標高およそ4500m)でフィールドワークを行なった。その後も調査を続けたが、1980年代後半から90年代にかけては、極左組織センデロ・ルミノソが勢力を拡大し治安が悪化したため、調査の重点をヒマラヤ(ネパール)やモンゴルに移した。1990年代後半からは治安が回復し、2001年からアンデスでの本格的な調査を10数年ぶりに再開することができた。また、ここ数年は、総合地球環境学研究所のプロジェクトで医学と連携し、山岳高所における生活の変化と病をテーマとし、ブータン、インド・ヒマラヤ、中国青海省などチベット・ヒマラヤの広域の調査を行ってきた。

2 高地から学ぶこと—自然とのかかわり

ふりかえってみると、現地調査は100回をこえ、山岳研究の専門家ようになっていた。研究目的はまずは高地の極限的な環境の中で家畜を飼って生きる人びとの多様な世界を知ること、そして関心は、家畜化や牧民社会の歴史や外部世界との関係にも広がってきた。

地球上で現在も牧畜が行われているのは、その多くが、乾燥地域、寒冷地域である。高地は、寒だけでなく、空気が薄く、傾斜地では山崩れなどが多い、環境が脆弱な地域でもある。農耕ができない、アンデスやヒマラヤの最高所では、人びとは動物を媒介にして、草という自然の資源を間接的に利用することで、生活を営んできた。地球における人間生活圏のフロンティア、極限地域たる所以である。そこでは、人びとは長い間に、自然とうまく折り合いをつけながら、最大限にしかも持続的に自然を利用し生活する知恵と技術を身に付けてきた。さらに、環境の異なる地域の人びとと交易をおこなうことによって生活を豊かにしてきた。人びとはまた、激しく変化する自然現象と直接に対峙する高地・極所での暮らしの中で、共同すること、助け合うことの重要性をしぜんに身につけ、社会の中にそうした仕組みをつくってきた。人知の及ばない自然への畏怖は超自然的力への信仰と結び付き、それは人びとを共通の価値観へと導いた。そうして、高地の人びとは、「高地文明」とも言うべき独自の世界を形成してきた。

アンデスとヒマラヤの二大高地は、人と自然との持続的な関係を考え直す上で絶好のフィールドである。さらに、草原での遊牧との対比によって、高地固有の牧畜の形態と人びとの暮らしの特徴をさらに明確にすることができる。

3 高所から学ぶこと—世界とのかかわり

一方、人間生活圏のフロンティアとして、長らく近代化・グローバル化の波から身を守ってきた高所世界も、今は急激な変化の過程にある。その変化は、歴史的な背景、さまざまな国内問題、国家の体制・政策、国境紛争など、相互に関連する多様な要素と絡み合っている。そして、それが長いスパンでの進化的適応や人類史と関わり、現在は生活様式の変化によって人の健康の問題とも大きく関わっている。

アンデス高所世界は、スペインによる征服と植民地化の歴史の流れの中に位置づけられる。さらに、近年のペルー・アンデス地域は、1990年代のフジモリ政権下での極左テロ封じ込めと開発をきっかけに、大きく変化してきた。

ヒマラヤに目を転じると、1959年の中国人民解放軍のチベット侵攻、ダライ・ラマ政権のインド亡命、1960年代初めの国境紛争による中国インド間の国境封鎖が、牧民の生活と社会に大きく影を落としてきた。近年では、例えばインド・ヒマラヤでは、国境地帯への夥しい数の軍事基地の展開、地域の実効支配のための自動車道路の整備、それがもたらす市場経済の浸透などが、現地の人びとの生活や社会にさまざまな、そして大きな影響を与えている。

モンゴルの遊牧社会は、ロシアと中国との国際関係、社会主義化、社会主義からの民主化・市場経済化への大きな変化に巻き込まれてきた。とりわけ、ロシアとの国境地帯で生活していたトナカイ遊牧民は、国境分断、モンゴルの国家体制の変革に翻弄されてきた。

このように、極限の地で生きる人びとの生活は、私たちと無縁な世界に生きているわけではない。これまで自然の障壁によって守られてきた高所世界は今、急激に押し寄せてきた外部世界によって揺れ動き、喘いでいる。その高所世界を知ることにより、自然との関わりという意味でも、世界との関わりという意味でも、私たち人間が地球の中で生きていることを実感させられるのである。



トナカイに乗る少年(モンゴル北部)

4 ステップ地域の遊牧とヒマラヤの移牧

伝統的な牧畜についての一般的なイメージは、例えば、モンゴルでゲルに住み草原を移動しながら家畜を飼う遊牧 (Nomadism, Nomadic pastoralism) であろう。そこで、山岳地域の牧畜の特徴を明らかにするために、まず典型的なステップ遊牧の形態を見ておこう。

モンゴルの牧民は五畜(ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダ)を飼うことを理想としている、とよく言われる。「家畜は生きた食糧貯蔵庫」などと言われるように、モンゴルの家畜は食糧(主に乳と肉)としても重要であるが、他の用途も乗用(ウマ、ラクダ)、運搬(ウマ、ウシ、ラクダ)、毛(ヤギ、ヒツジ、ラクダ)、皮など多様である。もっとも地域的な変異があり、南部の乾燥地域ゴビ以外ではラクダは少ない。また、寒冷な山岳地域や北部ではウシに加えてヤク(モンゴル語ではサルラック)やヤクとウシの異種間雑種(モンゴル語でハイナック)も多い。

社会主義体制下における牧畜の集団化の時代を経て、1990年代から、モンゴル牧民は再び自分の家畜として五畜を飼い、基本的には自由に季節移動を行うようになった。一般に、冬営地では、寒さから家畜を守るための一部に屋根を持つ家畜囲いを利用する。そのため、冬は同じ場所に戻るが、春から秋にかけては、よりよい放牧地を求めて自由に移動する。五畜はすべて搾乳することが可能であり、乳は特に夏の食糧として極めて重要である。乳はお茶に混ぜて飲むほか、ヨーグルトや各種のチーズに加工される。秋には、家畜が痩せる前に、ふつう家族毎に数頭の大型家畜(ウマ、ウシ、ラクダ)と10数頭程度のヒツジが屠殺される。寒冷なため、肉は自然状態で冷凍され、春まで食糧として利用できる。

現在のモンゴルの牧民は、小麦粉をかなり消費するが、本来は、夏の乳と冬の肉だけでも、少なくとも一定期間は生活を維持することができる。ステップや乾燥地域がどこまでも続くモンゴルの平原は、以前は農耕地域から遠く離れた地域も少なくなかった。そこでは、農耕や農民への直接的な依存度は低く、食用としての家畜の重要性は高かった。

結局、モンゴルの牧畜は、多様で大規模な群を飼うことで、多角的で自律性の高い牧畜経済を維持してきたといえよう。その自律性の維持のためには、乾燥度に応じて自由で(不規則で)広範囲な移動を迅速に行うことが重要である。

では、山岳地域の牧畜は、ステップ・乾燥地域の牧畜と比べてどのような特徴をもっているのだろうか。まず、世界の二大山岳地域であるアンデスとヒマラヤに共通して言えることは、家畜についてはその種類が少なく、用途も限定的だ(特化・専門化している)ということである。

ネパール・ヒマラヤのシェルパ民族の場合、農民の一部の世帯が、オオムギや、ジャガイモ、トウモロコ

シなどを栽培しながら、ヤク、またはゾムの飼養にも携わっている。飼養されるヤクやゾムの群の規模は、一般に数10頭である。ヤクを飼う主な目的はウシと交配させてゾムを生産することにある。生まれたゾムを売って現金収入を得るのである。一方、ゾムはウシやヤクよりも乳量が多く、ゾム飼養の主な目的は、乳を搾り、それからバターを生産して売ることである。どちらも現金収入源となるが、農民である彼らの主食は農産物である。さらにシェルパは敬虔な仏教徒であるため、彼らの家畜を食用のために屠殺することはない。

ソル地方ジュンベシ谷では、シェルパの農民たちは標高3000m弱の高さに住み、その周辺の畑で農耕を営んでいる。冬の間、ヤクやゾム(ヤクとウシの異種間雑種)の群は集落の周辺の森で放牧される。春になると、世帯の一部の成員が村を離れ、仮小屋に住みながら、家畜群を谷の上流に向かって次第に上げていく。夏には、標高4000mを超える、豊かな草が繁る谷の源頭部で放牧する。住居は移動の途中の滞在では木を材料とする仮小屋で、竹マット製屋根材だけを持ち運ぶ。夏の放牧地には石積みの固定家屋が建てられ、小さな集落が形成されている。秋になり高地部が寒くなり草も枯れてくると、再び下流に向かって、家畜が徐々に下ろされる。移動のサイクルが規則的で移動のルートも固定している、このような季節的上下移動が典型的な移牧(Pastoral transhumance)と呼ばれるものであり、先に述べたステップの遊牧とは異なる。

5 アンデスのユニークな牧畜 —乳利用の不在と定住性

ペルーからボリビアにかけての中央アンデスの高原でリヤマとアルパカが飼養されている。リヤマは荷役用、アルパカは毛の生産が主目的である。両者とも肉は食用にされるが、搾乳は行われない。旧大陸の牧畜では、一般に乳が食糧として重要な位置を占めているが、搾乳を行わないことがアンデスの牧畜のユニークな特徴の一つである。アンデスの牧畜のもう一つのユニークな特徴は定住的であることだ。プイカでは、一家族が20平方キロメートルほどの放牧地を占有し、その範囲内で放牧を行っている。

プイカ行政区全体は標高が3000メートルを超える高さに位置しているが、生態系が標高4000メートルを超える高原とそれ以下の峡谷とに大きく分かれる。そして、高原にアルパカとリヤマを飼う牧民が居住し、峡谷では農民が段々畑でトウモロコシやジャガイモなどを栽培している。峡谷を上がってゆくとなだらかな高原に達するが、そこには、むかし氷河によって侵食されたU字谷(氷食谷)がのびている。牧民の住居は、そのU字谷沿いに点在し、一般に谷の斜面の湧水が本流に注ぐ沢の近くに位置する。そこには、アルパカの放牧に適した湿原が形成されてい

るからである。アンデスの牧畜が定住的である要因の一つは、そうした湿原の存在である。中央アンデスには雨季乾季の明確な区分があるが、湿原は乾季でも潤れない。また、中央アンデスは緯度としては熱帯に位置しているため、気温の年変化が少ない。そのため、一家族が一年を通じて、数 100 頭の家畜を高原の一定の領域の中で維持することが可能である。そのような「熱帯」の「高地」という固有の条件が、アンデスにおける牧畜の定住性を可能にしているのである。

アンデスの牧畜のもう一つの特徴として乳の利用がないことを先に述べたが、乳の利用がなくても牧畜が成り立つ理由は、標高によって高原の牧畜地域と峡谷の農耕地域とが明確に区分されていること、同時にその二つの生態系が隣接していることである。そのため、専業の牧民でも、リヤマの輸送力を利用することで、農産物を得ることが容易である。つまり、農民のために農産物を段々畑から村まで運搬する作業を請け負って、農産物を報酬として得る方法や、肉や岩塩との物々交換などによって、農産物を得るのである。このように、アンデスの牧畜は農耕地との緊密な関係性の上に成り立ってきた。

6 アンデスの変化

一市場経済化とインカの伝統の復活

2001 年に久しぶりにペルー・アンデス南部を車で一周したとき、地方の道路整備がずいぶんと進んだことを実感した。道路周辺でみた牧畜における大きな変化は、リヤマを持たずアルパカだけを飼う牧民が増えてきたことである。輸送手段としてのリヤマの必要性が減じたからである。それは農民との関係が希薄化したことも意味する。

10 数年ぶりにプイカに行ってみると、そこでも大きな変化が起こっていた。道路が開通し、小型の定期バスが入っていたのだ。道路開通の影響で、プイカ村（プイカ行政区の中心の村）のほとんどの家が草葺屋根からトタン屋根に変わっていた。一旦トタンで葺いてしまえば長持ちがする。草葺屋根は葺き替えに労働の相互扶助を必要としたが、それがなくなった。外見よりも重要な変化は人びとの心の中に個人主義が広がったことだ。

このように市場原理が浸透しつつあるアンデスの高原で、たいへん興味深い「異変」が起こっていた。20 数年ぶりにナスカからアヤクチョの高原に車で上がったときのことだ。ビクーニャの数がずいぶんと増えていることに気付き、土地に人に話を聞いた。すると、「チャク」と呼ばれる追い込み猟を行っており、ビクーニャを捕獲し、その毛を刈ったあと生きたまま放つのだという。チャクはスペイン征服後に消滅したインカ時代の慣習である。その慣習がなんと 400 年のときを経て復活したのである。

7 チャクの復活の経緯と先住民社会の変化

インカ帝国の征服（1532 年）後にスペイン人や混血の年代記作者インカ・ガルシラソが残した記録に「チャク」についての記述がある。それによれば、歴代のインカ王がチャクと呼ばれる盛大な狩猟を催した。インディオたちが長く横隊を組み、徐々に包囲をせばめ、ついには獲物を手で捕らえるのであった。ラクダ科の野生動物であるビクーニャやグアナコは毛を刈られた後、生きたまま解放され、その数がキープ（結縄）に記録された。ビクーニャの毛はとくに質が高いため、インカ王に献上され、王族の衣服の材料とされた。

インカ時代には約 200 万頭のビクーニャがいたと考えられている。しかし帝国の崩壊とともに、無秩序な狩猟によってビクーニャの数は激減してしまった。1965 年には、個体数が 1 万頭を割り、絶滅の危機に直面した。そこでペルー政府はアヤクチョ県のルカーナス行政区のパンパ・ガレーラス（標高約 4000 メートル）に国立保護区を設立した。しかし、1980 年代センデロ・ルミノソに襲われ、保護区の管理は放棄された。1991 年、政府は、ビクーニャの管理権をその土地のコミュニティに付与し、刈られた毛を利用する権利を与える法律を公布した。その結果、各地にビクーニャ管理委員会が設立され、全国ビクーニャ協会が組織された。そして、日系人フジモリの政権下における治安の回復とともに、1993 年パンパ・ガレーラス保護区で最初のチャクが実施され、1994 年ビクーニャの毛の国際的な取引が開始された。

インカ時代には数万の民が動員されたが、現代では大規模な動員は難しい。そこで、草原にナイロン・ネットを V 字型に張る罠が考案された。この新技術により、通常のチャクは数 10 名程度で実施できるようになった。ルカーナス行政区だけでも、2001 年実績で、49 回のチャクをおこない、3890 頭のビクーニャから 898 キログラムの毛を刈り、約 15 万ドルの純収入になったという。これは、以前は想像もつかなかったほど大きな現金収入である。おかげで、ルカーナスでは電気の敷設や学校の新築などの基盤整備が進んだ。ビクーニャの毛は 1 キロ当たり 500 ドル以上の価格である。ビクーニャの重要性の認識が人びとの間に広まり密猟が抑制され、現在その個体数が 15 万頭以上に増加している。

野生動物保全と地域開発に貢献しているこの画期的な出来事の原因は何だろうか。むかしはインカ王に献上されたビクーニャの毛は、今はヨーロッパなどに輸出され高級衣料として商品化されている。インカの伝統がグローバル化と市場経済化の下で再生したのである。つまり、アンデス先住民社会に資本主義・市場経済が浸透し、市場と流通システムが確保された結果、チャクの再生と拡大を可能となったわけである。その背景に、フジモリ政権下で進められた道

路整備、地域開発、治安の回復などがある。

一方で、チャクの生産物の集積や輸出のため、先住民社会の全国組織が設立された。つまり、植民地時代に分断化が進んだ先住民コミュニティ間の横の連携が促されたのである。当然、実務能力の重要性が高まり、リーダーシップのあり方も変化した。残念な変化も生じている。全国組織における官僚主義や、これまでは問題にならなかったコミュニティ間の境界線をめぐる紛争の発生などである。さらに、今後は、ビクニーヤをもつコミュニティとそうでないコミュニティの間の格差も大きな問題となるだろう。

8 狩猟・牧畜論再考

狩猟と牧畜を、野生と家畜、また捕食(略取)と保護の対立にリンクさせて、両者を峻別する考え方は、研究者の間でかなり一般的である。たとえば、谷泰は「牧畜という生業技法を開発する以前では、いわゆるナチュラルな生活条件下にある野生動物の狩猟を通じて、動物資源を獲得していた。このことは、のちに家畜化された祖先野生種についても同じで、羊にせよ、山羊にせよ、牛にせよ、家畜化するまでは、それらを自然的所与としてみだし、自然からの強奪対象として追跡・捕獲・殺害して、食べていたに過ぎな

い」と述べている(谷泰 1995)。しかし、チャクによって、管理され、保護され、合理的に利用される「野生動物」の実態が明らかになった。インカ時代、チャクに先だって肉食の害獣が駆除されたという。また、チャクの対象となった動物には、シカのように殺して肉をとる(捕食される)野生動物もいれば、グアナコやビクニーヤのように、毛を取って生きたまま解放される動物もいた。さらに、「捕食」されるシカの場合も、若いメスや種オスとしてふさわしい立派なオスは生きたまま解放された。



モンゴル遊牧



アルパカの母子 (ペルー、標高 4500m)



ゴビ地方でのラクダの乳搾り



アルパカの毛刈り



Nak (Yak の雌) 乳搾り (ネパール標高 4300m)

家畜の定義として「家畜とはその生殖がヒトの管理のもとにある動物である」という考え方があるが、アンデスにおいては、野性動物に対して、「保護」するだけでなく、「生殖の管理」までおこなわれていたのである。チャクを「狩猟」と捉えるかどうかは定義の問題といえるが、いずれにせよ、チャクを考慮に入れると、狩猟／牧畜、野生／家畜、捕食／保護とが連鎖する対立の図式は揺らぐことになる。このように、チャクの存在は、動物と人間のかかわり方の多様性を示し、私たちに再考を促す。野生と家畜、狩猟と牧畜を対立的に捉えるのではなく、連続した人と動物の関係としてとらえ直すことが可能である。

ここでは、述べる余裕はないが、チャクの存在は動物の家畜化や牧畜成立の問題に対しても大きな示唆を与えるものである。西アジア考古学の研究から、野生動物の追い込み猟が動物家畜化の初動装置として着目されているからである（藤井純夫 2001）。

参考文献

- 稲村哲也 1995『リヤマとアルパカ アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社
 梅棹忠夫 1976『狩猟と遊牧の世界』講談社
 谷泰 1995「家畜化の起源をめぐって：考古学的意味での家畜化とはなんだったのか」福井勝義編『講座地球に生きる 4 自然と人間の共生』、225-248 頁
 藤井純夫 2001『世界の考古学⑩ムギとヒツジの考古学』同成社
 吉田禎吾、寺田和夫 1974『人類学入門』東京大学出版会



チャク：野生ラクダ科動物ビクーニャの群れを追い込む



チャク：ビクーニャ毛狩り



大学祭で学生たちと建てたゲル